

カズオ・イシグロの作品における「ノスタルジア」 についての考察

武富, 利亜

<https://doi.org/10.15017/1440986>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 武富 利亜

論文題名 : カズオ・イシグロの作品における「ノスタルジア」についての考察

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本博士論文においては、まず、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)、バジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain)、ピエール・ロティ (Pierre Loti) の文献とイシグロの日本を舞台にした小説、*A Pale View of Hills* と *An Artist of the Floating World* を対比させてその影響を考察する。ロティに関しては、先行研究などにおいて、『お菊さん』を題材にした Puccini の *Madam Butterfly* の影響について海外の研究者から指摘されている。しかし、本論においては、ハーンの日本人先祖崇拝や怪談、“Ghostly Japan”のイメージなどを中心に「微笑」、「幽霊」、「美術」を考察したい。

第二章では、イシグロが作家として文壇デビューを果たした *A Pale View of Hills* に焦点をあてる。海外の研究者を中心にイシグロの小説のなかの「日本人性」について、抽象的な概念（「もののあはれ」や「幽玄」等）を用いて表現しているものが多い。本論では、イシグロの *A Pale View of Hills* の根底に流れる悲哀感は、従来指摘されてきた抽象的な概念ではなく、その正体は、「喪失感」であることを、例をあげながら論じる。

第三章では、イシグロが好きな日本映画の監督として多くのインタビューで名前をあげる、小津安二郎や成瀬巳喜男、黒澤明、溝口健二といった日本の映画監督の影響を考察する。その中でも特に、小津安二郎監督の代表作である『東京物語』や『秋刀魚の味』を取りあげ、英語字幕と映像技法に着目する。イシグロは *An Artist of the Floating World* を出版して以降、日本を舞台とした小説を全く書かなくなっている。それは、イシグロが初期二小説の中に自らの日本を描ききったという満足のためかもしれないし、自分はもはや日本人ではなく、イギリス人なのだと自覚をもったためなのかもしれない。イシグロの小説の中に日本映画の影響を確認すればするほど、イシグロがいかにも視覚的、あるいは、聴覚的な材料に依拠しなければ、「日本」という社会が書けなかったかということがわかってくる。そこに日本を「遠い国」と呼ばざるを得ない、イシグロの苦悩のようなものや、感情では繋がっているというイシグロの「ノスタルジア」が浮かび上がってくるのである。

第四章では、イシグロの *The Remains of the Day* を中心に小説にあらわれる「皮肉な距離」に焦点をあてる。この距離は、日本とイギリスの二つの国に「帰属」する意識が持てない作家の独特の「距離感」といえるだろう。これまでに具体的にイシグロのアイデンティティと小説中の人物の間にあらわれる「皮肉な距離」を扱った論文は少なく、取りあげるに値すると思われる。

第五章は、イシグロ小説に描かれる父親と子ども、祖父と孫の関係を比較し、そこから浮かび上がる「父子関係」に焦点をあて、イシグロがどのような意図をもって、この親子関係を書いたのかを考察する。人生において情報を最も吸収しやすく、人格形成に多大な影響を及ぼす「子ども時代」は、あっという間に過ぎ去ってしまう。そこに「時の無常性」と「子ども時代」に良好な関係を築けなかった親子の「取り返しがつかない」という強烈な「ノスタルジア」が感じられるのである。

第六章は、*When We Were Orphans* を中心に「孤児」の意味するものを考察する。*The Unconsoled*

はイシグロなりの、人間関係において取り返しがつかなくなる前に行動を起こすことを促した小説だとしたら、*When We Were Orphans* は、取り返しがつかなくなった後にどう自分と向き合うかを問うた小説といえるのではないだろうか。*When We Were Orphans* には、運命を変える機会に巡り合ったときに、それをつかむ準備ができていないがために「孤独」な人生を送る主人公が描かれている。そこに、輝かしい日々を思いを馳せることしかできない主人公の「ノスタルジア」を感じるのである。本論においては、Banks が語らないものや比喩として用いる表現をキー・ワードとして考察したい。

第七章は、*Never Let Me Go* を中心に子ども時代の「記憶」を考察する。イシグロは、*The Unconsoled* を出版して以来、連続して「子ども時代」を扱ってきたが、*Never Let Me Go* には、それに加えてこれまでなかった「死」という主題を扱っている。本論においては、これまで指摘されることが少なかった、イシグロが繰り返し使用する“childhood bubble”に着目し、それは具体的にどのようなものなのか、「子ども時代のメタファー」は、イシグロの小説にどのようにあらわれているかを考察する。

本論は、「ノスタルジア」という概念を軸に、イシグロの小説の中にあられる様々な「ノスタルジア」に光をあてることを目的としている。また、イシグロが大切にしている、誰にも手が付けられていない、純真無垢な「子ども時代」の世界にむける眼差しには、時の流れの「無常性」のようなものが感じられる。同時に、時の流れは、読者に「老い」や「死」を意識させるものでもある。本論において、イシグロのそれぞれの小説にあられる「ノスタルジア」を抽出し、イシグロの「ノスタルジア」を分析することで、イシグロの作家としての特質やイシグロ小説の「手法」に迫れるものと確信している。